

遺伝外来における羊水による出生前診断に 関するアンケート調査

新潟大学医療技術短期大学部

本多 達雄・高橋美恵子

新潟大学医学部産婦人科教室

石田 道雄・高橋さゆり・田中 憲一

The Information Obtained by Questionnaires Concerning One's Image or
Feeling for Amniocentesis Changed Before and After Detailed Explanation
About Advantages and Disadvantages Existing at Amniocentesis.

Tatsuo HONDA and Mieko TAKAHASHI

College of Biomedical Technology, Niigata University

Michio ISHIDA, Sayuri TAKAHASHI and Kenichi TANAKA

*Department of Obstetrics and Gynecology,
Niigata University School of Medicine*

The image or feeling for amniocentesis changes before and after the explanation for the true state at amniocentesis. To obtain the image or feeling changed after explanation, we send out questionnaires to clients who have a wish to have amniocentesis at genetic counselling out-patient clinic in Niigata University.

Over 80% of clients felt difficult or dangerous and about 40% felt more anxious about her fetus after the explanation.

About 60% of the clients had an amniocentesis and a half of them felt difficult and dangerous, but they were very thankful to have amniocentesis.

Key words: ante-natal diagnosis, Down's syndrome, elderly pregnancy, amniocentesis

出生前診断, ダウン症候群, 高齢妊娠, 羊水穿刺

1. はじめに

新潟大学医学部産婦人科遺伝外来における羊水を用いた出生前診断は、昭和48年の遺伝外来開設年からなされ

てきたが、羊水診断希望者を対象としたアンケート調査は昭和55年より行われるようになり、この度ようやく80件を越えた。ちなみに平成3年8月までの当外来における全羊水穿刺施行例は97件であり、このうち、昭和55年

Reprint requests to: Tatsuo HONDA,
College of Biomedical Technology,
Niigata University, Asahimachi-dori 2,
Niigata City, 951, JAPAN.

別刷請求先: 〒951 新潟市旭町通2番町746
新潟大学医療技術短期大学部 本多達雄

以降のものは62件である。ここでは今回のアンケート調査から、羊水診断に関する、知識、イメージ、不安感、等について、年齢、妊娠回数、危険率、羊水診断希望の理由、等との関連から検討してみたのでその結果を報告する。

2. 研究方法並びに結果

昭和55年より表 8 のごときアンケート調査用紙を、遺伝外来の場で、羊水診断希望で遺伝外来を訪れた対象に、羊水診断に関する十分な説明がなされた時点で、原則としてもれなく配布し、回答を依頼した。回答者はすべて本人であり、夫やその他の身内等の代筆はなされていない。また、表 8 の 4 については、羊水穿刺を行った者について後日、羊水診断の結果を伝える以前の段階で書いていただくことになるが、その内容は全く自由とした。

平成 3 年 8 月末日までに計 107 件の対象について依頼されたアンケート調査の結果81件が蓄積された。全対象の内容としては、羊水穿刺に至った群67件 (62.6%) に対し、非穿刺群は40件 (37.4%) であり、両群間では前者で平均年齢がやや低く、妊娠回数、子供の数がやや多いという傾向を示したが、有意差はみられていない。ダウン症候群に代表される次子での異常発生の危険率に関しては、4.83%対 1.17%と大差があるが、常染色体性劣性遺伝病や伴性遺伝病などの高危険率群を除いた。表中に (1+2) と示してある。1. 高齢群 (52件) と、2. 前回児がダウン症候群 (36件) とを合わせたものを穿刺群と非穿刺群とに分けて比較すると、有意の差は得られなかった (表 1)。

アンケート調査の内容のうち、羊水診断に関する知識の出所については、表 2 のごとく、雑誌や医師によるものが圧倒的であり、回答が複数のものであれば、2 番目に医師やテレビをあげた者が多いという結果であった。

羊水診断に関する説明前後での胎児への不安感の変化はどうであったか、については、表 3 に見られるごとく、かえって心配になったと全く変わらないとで、74%を占め、あまり気にならなくなり安心した、と感じた者は 1/4 程度に過ぎなかった。

イメージの変化についても、表 4 にみるごとく、思ったより面倒、や、思ったより危険、等が圧倒的に多く、思ったより簡単・安全とするものはごく少数に過ぎなかった。

アンケート回答依頼の対象 107 件について、これを 1. 高齢群、2. 前 (先) 回ダウン症候群児を産んだ群、3.

表 1 羊水穿刺群と非穿刺群との比較

群	件数 (%)	平均年齢	G	P	危険率 %
羊水穿刺群	67(62.6)	34.15	1.92	1.31	4.83
(1+2)	(52)	35.65	1.81	1.27	1.38)
非穿刺群	40(37.4)	36.45	1.83	1.18	1.17
(1+2)	(36)	36.97	1.75	1.08	1.17)
	107(100.0)	35.00	1.89	1.26	3.34

(G: 妊娠回数)
(P: 産児数)

表 2 羊水診断に関する知識の出所

出所	(1) 件数 (%)	(2) 件数 (%)
雑誌	30(37.0)	3(10.0)
医師	27(33.3)	11(36.7)
新聞	10(12.3)	0
知人	7(8.6)	3(10.0)
テレビ	3(3.7)	6(20.0)
助産婦	1(1.2)	3(10.0)
保健所	0	1(3.3)
その他	3(3.7)	3(10.0)
計	81(100.0)	30(100.0)

表 3 羊水診断に関する説明前後での胎児への不安感の変化

不安感の変化	件数	%
かえって心配になった	31	38.8
全く変わらない	28	35.0
あまり気にならなくなり安心した	17	21.3
その他	4	5.0
計	80	100.0

表 4 羊水診断に関する説明の前後での羊水診断に対するイメージの変化

イメージの変化	(1) 件数 (%)	(2) 件数 (%)
思ったより面倒	49(60.5)	0
思ったより危険	18(22.2)	39(90.7)
思ったとおり	11(13.6)	1(2.3)
思ったより簡単	2(2.5)	1(2.3)
思ったより安全	1(1.2)	2(4.7)
計	81(100.0)	43(100.0)

表5 各群別年齢、妊娠・分娩数、危険率の平均

群	件数(%)	平均年齢	G	P	危険率%
高 齢	46(43.0)	39.98	1.50	0.78	1.30
SD		2.41	1.26	0.83	7.83
前回DS児	42(39.3)	32.05	2.10	1.64	1.27
SD		3.89	0.97	0.75	3.04
その他	19(17.8)	29.53	2.39	1.61	22.5
SD		4.46	1.38	0.83	137.1
	107(100.0)	35.00	1.89	1.26	3.34

表6 羊水穿刺時の妊娠週数
平均 16W3D (12W4D-21W1D)

穿刺時週数	件 数
14W 以下	3
15W	9
16W	29
17W	12
18W	5
19W	1
20W 以上	1
計	60

表7 羊水穿刺症例の感想文(34件)

1. 説明を受けて()と感じた。
 1. 不安, 危険, etc, 14
 2. 安心 3
2. 穿刺を決意するまでに大いに迷った。 6
3. 穿刺時は
 1. 気持ち悪い, 痛い, 思ったより大変 8
 2. 安全, 簡単, 安心, 平静 7
4. 受けた後
 1. 流産が心配 4
 2. 安心 7
5. 結果が出るまでの間
 1. 神に逆らい罪の意識 1
 2. 早く結果が知りたい 2
 3. やって良かった, 次の時も受けたい 7
 4. 有難うございました 2
 5. 遠距離からの通院(6回)は大変 1
 6. 2度目で, 先回とは違った不安, 心配 1
 7. 親として出来るだけのことをしたかった, 後は神任せ 2
 8. 万一の場合でも産んであげたい気持ちが強く, 苦しかった 1

表8 羊水診断に関する調査(新潟大学産婦人科遺伝外来)

平成 年 月 日

氏名 才

1. 羊水診断について, どこから知識を得ましたか?
 1. 新聞 2. 雑誌 3. テレビ 4. 医師
 5. 保健所 6. 助産婦 7. 知人 8. その他()
2. 羊水診断についての説明を受ける前と後とでは, お腹の赤ちゃんへの不安はどのように変わりましたか?
 1. 全く変わらない.
 2. あまり気にならなくなり, 安心した.
 3. かえって心配になった.
 4. その他()
3. 羊水診断の説明の前と後とでは, 羊水診断に対するあなたのイメージは, どのように変わりましたか? 番号に○をつけて下さい。
 - A. 思ったより, 1. めんどく, 2. かんたん, な検査だと思った.
 - B. 思ったより, 3. きげん, 4. 安全, な検査だと感じた.
 - C. 5. 思ったとおりであった.
4. 「羊水診断を行って」という題で感想文を書いて下さい。

その他の群、の3群に分けてその年齢、妊娠・分娩回数、異常児分娩危険率の平均について比較して見たものが表5である。ばらつきの程度を知るためにSDすなわち標準偏差値を付記してあるが、高齢群とDS(ダウン症候群)群間で、年齢では0.1%、妊娠回数では5%、分娩の数では0.1%の危険率で有意差を見ている。

表6は、羊水穿刺例67件中他施設での穿刺例等の7件を除いた60件についての羊水穿刺週数の調査結果である。穿刺平均週数は16週3日で、そのほとんどが15~17週に含まれていた。

次に、羊水穿刺の感想文についてであるが、入手せる34件の回答について、便宜上、1.説明後、2.穿刺を決意するまで、3.穿刺時、4.穿刺を受けた後、5.結果が出るまでの間、のそれぞれの時期に於ける感想として人数で割り振った。その結果は表7に示した(表7)。

3. 考 案

遺伝相談の場にあつては、たとえCLIENTが羊水診断を希望して来訪したにしろ、できるだけ詳細な家系図の聴取を行い、一般的先天異常の発生頻度や、妊娠・分娩がある程度「ばくち」性を帯びていることなどについての予備知識を与えるようにしている。

羊水穿刺による出生前診断は、1.夫婦のいずれかが染色体異常保因者である。2.ダウン症候群などに代表される染色体異常児を出産した既往のある婦人。3.高年妊娠。4.先天代謝異常などの保因者。5.その他特殊な場合。について、これらいずれかの条件を満たすものを対象として、個々の危険率と羊水診断手技ならびに診断の限界に関する説明を十分に行い、また、それ自体により生ずるメリット・デメリットを示しつつ、最終的には十分納得した上で、自ずからの判断により、自ずからの意志で穿刺を行うか否かを決定させる様にもっていくのが常道であつて、決して羊水診断を「行うべきだ」とか、「行わなくてよい」とかの発言で誘導すべきではない。たしかに羊水穿刺による胎児死亡(流産・死産)の過去12年間の報告の平均は1.4%といわれ、一般頻度の2.3%に比較して決して高くはないといわれているが(山村、坂元、1982)¹⁾、事故はいつでも起こり得るし、また、表7にあるごとく、万が一異常児妊娠と判明したとしても、必ずしも中絶を希望するとは限らないなど、本人の判断による意志表明が大切なので、事前に十分な判断資料を与え、十分納得させて一応の方針を立てさせる必要がある。表2に見るごとく羊水診断に関する知識の出所は、医師によるものがかなり多いとはいえ、そ

の時点で羊水穿刺に関する細かい説明がなされていることは稀であるし、雑誌や新聞の場合では極めて安全無害であり、いとも簡単に行えることが強調され過ぎている嫌いが無くはない。これらの理由からか羊水穿刺に関する説明の後で、表4のイメージが、80%以上で「思ったより面倒」や「思ったより危険」と変わらざるを得ない結果となったと思われる。一方、お腹の赤ちゃんに対する不安感に関しては、羊水診断に関する説明の後で、「かえて心配になった」とするものがなぜか40%近く(表3)、「あまり気にならなくなり安心した」の倍近くもあつて、「妊娠・分娩がある程度ばくち的である」などの説明がそうさせた可能性はある。とはいえ、この程度のことは事前に言う必要があると信じている。

とにかく、これら希望者の60%以上が羊水穿刺を受けたわけであるが、一部は種々の理由で他施設で穿刺を受けている。これら羊水穿刺群と羊水穿刺を行わないことに決定した「非羊水穿刺群」とについて、年齢、妊娠回数、分娩回数、胎児異常の危険率に関する対比を行つてみたのが表1である。羊水穿刺群の中には、伴性劣性遺伝病や常染色体劣性遺伝病などの高危険率のものが含まれるので、これらを除いたもの88件について対比させたものが(1+2)群であり、前述のごとき傾向はみられたが、両者の間に有意の差は認められていない。ところが、この88件を羊水穿刺の有無に関わりなく「高齢群」と「前回DS児群」とに分けて対比させてみると、年齢については当然であるが、妊娠回数で5%、分娩数で0.1%の危険率で有意差がみられた。ただし、危険率については差は無かつた。この結果は、高齢群では、高齢であるにもかかわらず、分娩回数が有意に少ないことを示しており、その原因として、「晩婚」や「医療の恩恵による、元来妊娠が望み難い婦人の妊娠」など最近の社会の傾向を反映した解釈が成り立つ²⁾。ダウン症候群児分娩の危険が婦人の加齢と共に増加して行くことは確たる事実であるが、ここでのこの群の平均年齢は32.05才と決して高くはないといえる。

羊水穿刺については、表6に見るごとくその殆どが15~17週の間になされていた。

実際問題として、1991年の法律改正により、18週以降での羊水穿刺はこの目的では行われなくなるであろう。

表7は羊水穿刺症例34例における感想文の内容を振り分けたものである。内容に関しては、特に指示はなく、個々に感じたことが記載されているわけで、ここでも、説明により不安や危険を感じたものが多く、穿刺を決意するまでに大いに悩み(その挙げ句穿刺を行わなかつた

ものの感想はここには含まれていない), 穿刺時は嫌な思いをした人と気楽だった人とが半々, 受けた後一仕事終わって安心した人も多いが, お腹が張ったりして流産するのではないかと心配だった人も少なくない. 結果が出るまでの間は, やって良かった, 次の妊娠でも受けたい, という人が多いとはいえ, 罪の意識や万一の場合でも生命を絶つことに対する苦しみなど, 個々の人間としての, 個性のにじみ出た内容の回答であった.

4. おわりに

出生前診断の目的で羊水穿刺を希望して当科遺伝外来に訪れる妊婦が示した, 羊水穿刺に対する事前の知識と羊水穿刺に関する詳しい説明をした後のイメージや不安などの意識の変化について, アンケート調査を基に, 妊婦の「年齢」「危険率」「子供の数」「妊娠回数」「羊水診断希望の理由」の面から検討した. また, 羊水穿刺実施妊婦における羊水穿刺の感想について, 集計した. その結果, 説明を受けた後に不安が大きくなったとする者

が安心したとする者より多かった. また, 羊水穿刺そのものは, 種々の面でつらかったが, 以後の精神面でのメリットを多くの者が唱え, 感謝の気持ちを表し, 次の機会にも受けたいとする者が少なくなかった.

本研究の一部は新潟大学学術奨励会による研究補助を受けた.

参考文献

- 1) 山村雄一, 坂元正一: 遺伝相談ガイドブック (厚生省 心身障害研究: 昭和57年度研究報告書) p. 181, 1982.
- 2) 本多達雄, 石田道雄, 田中憲一: 高齢妊婦に対する遺伝相談の実態. 新潟医学会雑誌, 104(11): 942~945, 1990.

(平成4年1月14日受付)